

# 天下のため、国家のため

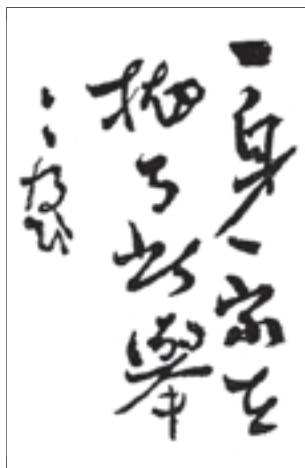
## 斬奸趣意書で星を糾弾

「私儀、天下公論如何ヲ顧ミズ一身一家ヲ抛チ此拳ニ及ビ天下ノ為ニ為スアラント信ジ…」。星亨刺殺事件を前に、予め伊庭想太郎がしたためていた「斬奸趣意書」の書き出しである。

想太郎が星殺害の決意を固めたのは、決行の9日前、つまり明治34年（1901）6月12日だった。無言で自宅を出て、そのまま帰らず、知人宅などを転々とした。雑念を払って、この間に清書したのが斬奸趣意書である。

前年の東京市教育会発起人会で星が会長に就任したことについて、痛烈な言葉で星を攻撃している。原文の旧字を改めるなどして、その一部を引く。

「生儀、星亨氏トコレマデー面ノ交リモナク、亦些カモ悪怨恨ナシ（略）、然ルニ星亨氏、本会会長トシテ其挙行所為ノ横邪ナル。共ニ神聖ナル教育上ノ事ヲ断ズルヲ心ニ潔シトセズ（略）」



(上) 想太郎と長男孝、(下) 斬奸趣意書の筆跡＝『訟庭論草』所収

「果シテ此老賊星亨、東京市政ヲ紊乱汚蔑シ、從テ市民ノ徳義心ヲ破害シ自ラ市吏員ノ不正ヲ監督スベキ名誉職ニ在リナガラ（略）、万民ノ憂慮大恥タル収賄罪惡ヲ醜類ノ首領トシテ敢犯シ…（略）、其毒害ハ終ニ満天下ノ学生ヲ墮落破害スル是ヨリ大ナルハナシ…」

実は、その発起人会には、想太郎も四谷区会議員・学務委員長の立場で参加した。星の会長就任に想太郎が独り反対、ついには途中退場までして抵抗したが、星の権勢に追従する勢力に押切られたいきさつがある。

## 「伊庭家ヲ断絶セシメヨ」

想太郎は決行を前に、趣意書を日本、毎日、都の3新聞社あてに投函した。それぞれ貴族院、衆議院などへ送付するよう依頼状が付されていた。

妻貞子あての書状もしたためた。「国家ノ為メ此ノ拳ニ出ル…（略）、死後、累ノ御身ニ及ブコトヲ惧レ、断然御身ヲ離縁セン…」。さらに長男孝（養子）を生家に戻し、他の2子も親類の養子に出すように指示して、「伊庭家ハ一時之ヲ断絶セシメヨ」としている。

そして、6月21日を迎えた。

紋付羽織姿で伝家の短刀を懐に東京市役所へ。星との面会を求めたが、謝絶する旨伝えられた。そこで、外から参事会室をうかがうと、参事や市幹部らが顔をそろえていて、席に星の姿があった。

想太郎は室内に入り、星に近づくと「逆賊星」と叫び、短刀でその左胸を刺し、さらに数刀を加えた。返り血を浴びた想太郎を、周囲にいた書記らが想太郎を取り押さえようとした。想太郎は「国家のためやむを得ず刺した」と叫び、短刀を差し出した。

星は出血多量で即死した。実力者の無残な最期だった。享年51歳。

## 伊庭 孝（1887-1937）

伊庭想太郎の長男（養子）。同志社中退。近代劇協会を創設。音楽評論家、演出家。浅草オペラの演出、ラジオの音楽評論などに活躍。著書に『日本音楽概論』など。